

ジェームズ・マクニール・ホイッスラー作《アトリエのホイッスラー》にみられる 《ラス・メニーナス》の影響とその意義

佐藤 菜々子 (吉野石膏美術振興財団)

19世紀後半に活躍したアメリカ人画家、ジェームズ・マクニール・ホイッスラーが1860年代後半に制作した《アトリエのホイッスラー》(シカゴ美術館)と《画家のアトリエ》(ダブリン市立近代美術館)は、近年ディエゴ・ベラスケスの傑作《ラス・メニーナス》(プラド美術館)の影響が指摘され、近代芸術家のベラスケス受容という観点から関心を集めるようになった小型の油彩画である。両作品は、ホイッスラーがサロン出品用の大作としてとりこんでいた記録が残る油彩画の習作と考えられてきた。しかしこの作品に関しては、画家とその友人、モデルがアトリエにいる情景という構想が書かれた書簡以外に資料は残されていない。

そのため、現存する2作品はこれまで幻の意欲作への取り組みを示す資料としてふれられるだけで、作品分析も当時の代表作とのモチーフの関連が指摘されるにとどまってきた。同時代の証言や記述の検討を含めた包括的な議論も今までなされず、ホイッスラーのベラスケス受容の一例として紹介されるのみであった本作の位置づけは、極めて曖昧なままである。本論ではこの2つのアトリエ画を、書簡で語られた構想を発展させた新たな試みとしてとらえ、特に《アトリエのホイッスラー》を、《画家のアトリエ》をふまえて制作された完成作として分析する。そして《ラス・メニーナス》の影響がもつ意味を再考することで、ホイッスラーの画業における作品の意義を明らかにしていく。

まず当時の資料をたどることで、両作品ともホイッスラー自身がその来歴に深く関わっており、周囲の人々にもその存在が知られ、親しまれていたことを明らかにする。また、シカゴ作品に関しては独立した作品としての評価も与えられていたことを確認する。

次に、構想の段階では重要な意味を持っていたはずの友人達の姿が画面から消え、画家とモデルのみのきわめて閉鎖的な空間に変わっている点に注目し、作品の主題の変化と、それに伴い《ラス・メニーナス》の絵画的要素が画中にどのようにとり入れられていったかを考察する。

そしてアトリエ画が制作された時期における、ホイッスラーの広範な芸術活動の重要性について考えていく。当時のフランス、イギリスそれぞれにおけるベラスケスの称揚については、既に様々な指摘がある。しかし、それが両国間の競争意識のもとに進展していたことはあまり知られていない。パリとロンドンで活動し、その動きに深くかかわっていたホイッスラーが、ベラスケス作品の魅力と、その様々なとらえかたを目にして、自らの作品に取り入れる要素を吟味し、独自の表現へとつなげる必要性を当時強く意識していたことを明らかにする。

最後にホイッスラーがアトリエ画で試みた工夫が、1870年代初めにとりこんだ肖像画でより大きな成果として結実し、かつ周辺の画家の作品に見られる《ラス・メニーナス》の翻案に影響を与えたことを指摘して、その重要性を確認したい。